

山形県庄内地方における信仰の重層性と競合に関する地理学的研究

筒井 裕 (帝京大学)

日本の人文地理学分野における信仰圏研究は、1983年の岩鼻通明による出羽三山信仰圏の研究以降、次の課題を残したままとなっている。

- ① 特定の信仰の分布が疎らになる要因を「類似した属性をもつ信仰対象間の競合」と解釈し、これがいかなる状態を示すか実証的に解明していないこと。
- ② 特定の信仰圏が形成される要因を、様々な信仰の受容との関係性から考察していないこと。

以上の点を解明すべく、筆者は山形県庄内地方の霊山「鳥海山」の信仰圏と鳥海山信仰の講（登拝講）を事例に研究を進めた。同地方は鳥海山と出羽三山という「類似した属性をもつ信仰対象」が隣接し、古くから両者に対して篤信的な地域となっている。また庄内地方は、神道文化を重視する日本有数の地域でもある。本研究では、主に庄内地方に分布する登拝講83団体を対象に聞き取り調査を行い、同地方の人々が様々な信仰をどのように受容しているのかを把握するとともに、「信仰対象間の競合」とはいかなる状況を意味するか検討した。

現地調査の結果、鳥海山信仰圏内では登拝講のほかに31種類170団体の講が組織されていた。庄内地方北部（最上川以北）の各集落では、登拝講を含む鳥海山信仰の様々な講を重複的に組織し、各世帯の全構成員が通年でこれらの活動に参加する傾向にある。このため、彼らが他の信仰対象を崇める機会はほとんどない。これに対し、庄内地方南部（最上川以南）においては、伊勢神宮・古峯神社・出羽三山・鶴岡市内の寺社を信仰する講が多数組織されており、これらが鳥海山信仰の強固な定着を妨げる要因になっていると考えられる。たとえば、最上川以南の余目・三川・藤島町では伊勢神宮・古峯神社・出羽三山・鳥海山に、毎年1回ずつ代参を行う。また、戸主層のみが登拝講の活動を通して鳥海山・出羽三山に参拝するだけで、住民たちは「集落のレジャー活動」となっている伊勢神宮・古峯神社への参拝に対してより高い関心を持ち、そのために毎年、高額の費用を提供している。よって、同地域の人々の宗教的関心は分散していると言える。鶴岡市以南でも、戸主層が登拝講の活動として鳥海山・出羽三山に代参を行う。ところが、彼らを含む様々な属性の人々（既婚女性・男性有志）は出羽三山信仰の講を別個に組織し、年数回の頻度で活動を行っている。これに加え、同地域では鶴岡市内の寺社への代参（年1回）や伊勢講の集会の開催（春・秋）などの活動も盛んで、鳥海山に対する宗教的関心は著しく低くなっている。

以上から「信仰対象間の競合」とは、①特定の信仰対象がある特定の属性にのみ受容されている、またはどの属性にも受容されていない、②特定の信仰対象を崇める機会が著しく少ない、あるいは皆無である、そして③他の信仰対象に係る経済的支出を厭わないという三つの条件を満たした状況を意味するものと結論された。